

フォーラム修了レポート

自己と他者の相互理解のためにできること

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

今回のフォーラム参加者たちは、程度の差はありつつも各々が環境問題について関心があり、一つのトピックに関してでもそれぞれの専門や関心によって、捉え方が異なることがとても面白かった。私は環境問題と言われるとどうしても、自然環境や、大気汚染、ゴミ問題といったことが思い浮かぶのだが、今回のフォーラムでは、移民・難民といった、人間にフォーカスした環境問題についての発表もあったことが特徴であると感じた。

当初、人間にフォーカスした環境問題のテーマというのは、環境問題を解決することになるのか、と疑問に思っていたが、様々な発表を聞く内に、人間の環境を整えることが結果的には自然環境の改善につながるのではないかと思った。今現在、世界で起きている環境問題というのは、その多くが人間によって引き起こされている。プラスチックの量を減らす、二酸化炭素の排出量を減らすというのは問題に対して私たちが直接働きかけることのできる解決策である。しかし、外国人や移民といった、ある地域においてマイノリティとなる人々は、私たちが今回議論したような問題について学ぶ機会が与えられなかったり、意見を伝える手段が不足していたりする。つまり、彼らは無意識的に環境問題を悪化させているかもしれないし、改善したいと思っても、問題を悪化させているマジョリティに対して意見を伝えられないかもしれないのである。

私たちが住んでいる地球は決して、日本人とアメリカ人で成り立っているわけではない。世界全体で見れば、今回、このフォーラムに参加した私たちは強者寄りの存在だろう。全ての人に対等に知識を得て、意見を言うことができる環境を作ることが、より良い世界をつくることになるのではないかと思った。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

今回、5日間のフォーラムに参加して感じたことは、日本人ではない見た目の人に対

面すると、私はつい英語で話してしまうということだ。ヴァッサーの学生たちは程度の差はあっても日本語で話すことができ、可能な限り日本語でコミュニケーションをとろうとしてくれた。その際は日本語で話すのだが、自分から話しかけるとなると英語で話していた。このことは、あまり日本語に対して自信のない相手にとっては良いかもしれないが、日本語力に自信がある相手によっては不快に感じることもあるかもしれないと思った。もし日本国内で同じような対応をした場合、相手を他者、外国人としてみなしているというメッセージにとられかねない。何人のように見えるから、この言葉を話さだろう、といったように、見た目で相手の話す言葉を決めるのは、相手を無意識のうちに傷つける可能性があるように感じた。

また、日本の英語教育の問題点も発見することができた。現地の学生に、「どうして英語を勉強しようと思ったの？」と聞かれた際、私と一緒にいた友人はみな、すぐに答えることができなかった。決して英語が嫌いというわけではないが、大学受験で使うから高校時代は勉強をしていたし、中学の時はその基礎作りという形で、特にこちらの意思が明確にあった上で英語を学んできたわけではない。仮に何かあるとするのなら、世界で使われている言語だから勉強し始めた、というのが最初のきっかけだろう。それが完全に悪い、というわけではないが、生徒側の主体性に欠けているように感じた。アメリカの学生は自分でカリキュラムを組み、積極的に自分の学びについて考えるからこそ、活発な意見が出るようになるし、質問も多いのではないかと。一方、日本の学生は、定められた授業時間割を受け、知識を確実に習得することに重きを置くため、受動的な学びに見えてしまうように感じた。日本人は、アメリカ人は、という人種によって性格まで分類をすることは私は嫌いだが、思春期にどういった学びの形の下で過ごすかによって、多少は性格の変化に影響しているのではないかと思った。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

フォーラムな発表自体は、日本語と英語の両方を、相手を思いやりながらつかうことで議論を深められたので良かったと思う。しかし、相手の授業の問題もあって、3・4日目の昼の時間がかなりの空き時間になったことが気になった。日本でそれなりの準備

をしていけば現地ではあまり準備の時間はいらないので、折角ならば、もっとたくさん
の授業を見学したり、日本語のクラスのサポーターとしてお手伝いできれば良かった
と思う。現地の大学の雰囲気だけを楽しむのではなく、授業や生徒たちとの会話の時間
が更に多ければ、参加した学生たちが、留学をしたいかしたくないか、海外の学生はど
のようなことを考えていて自分と何が違うのか、ということを考えるきっかけが生まれ
ると思った。

4. その他

私たちはアメリカに行けばアジア人で、2020年2月現在は新型コロナウイルスが蔓
延している東アジアから来た人になる。ニューヨークシティを散策している間、何が差
別で、何がそうでないのか、ということ考えた。

ヴァッサー大学に通う、アジア人の学生は、キャンパス以外の土地でなら多少差別を
受けたことがあると言っていた。振り返れば、ニューヨークシティまでいく電車の中
で、人が多くても私たちの隣に座る人はいなかった。しかし、私はそれを差別とは感じ
なかった。妄言を浴びせられ。暴力を振るわれたわけではなかったので、それは私の中
では差別にはならなかった。しかし、彼女は、アジア系の人だからこうされた、と白人
や黒人の人の行動に対してコメントをしていた。

だが、果たして彼らの行動が本当に差別的な意識があったのかはわからない。彼女は
これ以外にも様々な経験をしているからこそ、そう思うのかもしれないが、そこに私が
同調し、差別だ、と怒る必要はないように感じた。何を差別、いじめとしてとるかは、
その人のバックグラウンドや今までの経験が強く関係していて、個人の感覚の差であ
る。だからこそ、私は差別とは感じなかった、と線引きをすることができた。

傷ついた心に寄り添うことは大切だが、そこから生まれる怒りや反発性に対して、無
条件に賛同しないことが、平和な社会を作る手助けになるのではないか。

フォーラム修了レポート

国境を越えて国境のない環境問題を見つめる

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

今回国際学生フォーラムが開催されたアメリカは私にとって、ニュースや教科書で度々目にする国であったもののどんな国なのか全くわからない場所であった。しかし太平洋を越えた一歩先の国に足を踏み入れることで、国境のない社会問題である環境問題に対しいちシティズンの立場で議論することができた。

本フォーラムに参加する全ての学生にとって、お互いの発表を聞く上で最も重要なのは環境問題への姿勢の共有である。考え方や価値観、生活習慣が大きく異なる二国間の大学生同士が話し合うために、両国が抱える現状や国民性の違いをベースとして知っておくことでディスカッションをスムーズに行うことができるからだ。そのため基調講演は教授たちによる環境問題への取り組み方を全学生に提示し、ディスカッションを円滑にするために必要不可欠であった。基調講演では3名の教授が自身の研究分野から環境問題への意見を述べていた。全て英語であり、専門用語が多く使用されていたため聞き取りと理解には苦労したが、教授たちの専門分野から見た本フォーラムの意義や環境問題への提言は私の今後の生活において非常に勉強になった。

私自身の発表については、15分という限られた発表時間の中で良かった点も反省点も数多く気付かされた。事前に日本で準備を行ってプレゼンテーション練習を行い、本番を迎えたつもりであったが、予測つかないようなことも多くあった。良かったことは自分の専攻分野の視点から調査し図表にまとめプレゼンテーションできた点である。自分らしい発表が行えたと同時に、環境問題への具体的な提言や今後の課題について言及することができた。一方、反省点は質問タイムでの質問のやり取りである。いくら事前準備をできていても、いきなり質問をしかも英語でされるのは少々困惑してしまった気がする。質問タイムの中では研究テーマに対する柔軟な考え方が大事であると同時に、理路整然と英語で話すことの難しさも痛感することになった。

他の生徒の発表も大変示唆に富んでいた。環境問題と一口に言っても日米の学生が取り上げるトピックの切り取り方の違いや研究テーマも各自独自性を感じた上に、実際に自分でも提言を実行する学生もいたため驚かされた。大学生は4年間の間に自分にできることを見つけて行動するべきだと、同世代の大学生から学問的学びのみならず実行することの大切さも学ばされるが多かった。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

基調講演では、自分の当たり前を見つめ直し他者の当たり前や社会の理に目を向けることの大切さを学んだが、この学んだことを実際にアメリカに滞在しているときも体験することとなった。例えば、本フォーラムの中でもテーマに上がり議論になった「ベジタリアン」について、バディとの交流の中で考えさせられることがあった。私は今まで日本で生活する中でベジタリアンという言葉は知っていたものの、物珍しい言葉であるといったイメージでしかなかった。しかしアメリカでお世話になった私のバディはベジタリアンであった。そのためウェルカムパーティーや外食の中で一緒にごはんを食べたときに、食事を選べないという場面を目の当たりにした。アメリカでは基本的に肉が多く使われた料理が数多くあり、殆どの場合バディが選べるものはほんの数種類しかなかった。理由を尋ねたところ、環境問題を学ぶ上で過度な肉食を選ぶことは環境破壊につながることを学んだからだと言っていた。大学で学んだことを実生活で実践しているバディをみて、自分の当たりの小ささを痛感し、食事の選択肢を狭められている私のバディのようなベジタリアンのための料理がアメリカのみならず世界中で増えるといいなと思った。

言語の使用についても、言語学を学ぶ私にとって多くの学びや気づきを受けた。まず発表の際には、第二言語である英語によって理論立てて説明することが求められた。一方、生活するなかでは英語の文脈やイントネーションよりはコミュニケーションやジェスチャー力を意識していたと感じる。よって発表時と生活面では、いかに求められる英語力が場面場面で違うのかを実感し、言語学による学習言語能力と生活言語能力の違い

を学んだ。

また基調講演等のシティズンシップ教育を通して、一人一人が自国にフォーカスして考えすぎず、地球に住む一人として視野を広げることの重要性を感じた。本フォーラムにより、グローバルな視点を持ったいち世界市民になることは世界の環境問題を積極的に関わろうとする上で大切だと感じるが多かった。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

本フォーラムの中で評価できる点は、同世代のヴァッサー大学生が日本語を流暢に話していたことだ。第二言語教育を学ぶ者として刺激を受けるが多かった。改善すべき点は、バディとの交流機会が少なかったことだ。もう少しバディとでかけたりディスカッションしたりする機会を得たかったというのが正直なところである。

4. その他

アメリカで初めて創設された女子大学が前身のヴァッサー大学と日本で初めて創設された女子大学が提携し、先進的な活動をしていることにとっても感銘を受けた。これからも2大学が率先して社会課題に取り組んでいくことができれば良いと考える。

また、コロナウィルス発生にあたり、多くのイベントや企画が中止になっている中でアメリカ研修に行かせていただいたこと、ヴァッサー大学でもきちんと受け入れ体制を整えてくれていたことのありがたさを本当に身にしみて感じた。

最後に、本文は筆者がヴァッサー大学の国際学生フォーラムに参加した際の学びをまとめたものである。森山新先生には指導教官として本研究の実施の機会を与えて戴き、その遂行にあたって終始ご指導を戴いた。私のバディには夜遅くまで指導して頂き多くの学びを得た。ここに深謝の意を表す。並びに、本フォーラムではヴァッサー大学の先生をはじめ、日米両方の学生に数々の有益なご助言を戴いた。ここに感謝の意を表す。

フォーラム修了レポート

サイエンスにとどまらない環境問題

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

国際学生フォーラムの歴史は長く、その内容としては「現在繰り広げられている様々な国際問題に対してグローバルな視点から、学生自身での話し合いによって答えを見つけ出すこと」に重きを置いているものです。第9回となる今回のフォーラムでは環境問題をテーマとし、自然災害にとどまらず現代社会問題など的人為的災害の問題にも向き合い、話し合いを行いました。

理学部化学科に所属する私が選んだトピックはプラスチック汚染です。化学者が作り出したプラスチックはこれまでの物質と異なって多くの利点（軽い・安い・腐食しないなど）を持ち合わせた素晴らしい物質であることに間違いありません。しかしそのために私たちは自然によって分解されることのないプラスチックを大量生産し、その結果ごみ問題や資源問題、環境汚染問題などの大きな問題を引き起こしています。それらの問題はどのように解決することができるのかを発表の大きなテーマとしました。

事前学習では、自身が学んでいる「有機高分子」としてのプラスチックの性質から、なぜそれらは分解されないのか、またそのために引き起こされている問題点はどのようなものを調べ、解決方法を模索しました。フォーラム当日の発表では自分の目線からだけでは得ることのできなかつた疑問点も飛び交い、分野の枠を超えた話し合いの場の重要性を実感できました。

また、お茶大・ヴァッサー大学双方の発表のテーマはサイエンスに関わるものだけでなく、移民問題・ファッション・地域活動など様々でした。それぞれが時間をかけてまとめあげた発表と、それに対して飛び交う質疑応答のディスカッションは、これまでにない知識と発見の宝庫であり、またすべてが「環境問題」の一部であるという実感も生まれたためトピックそのものについての理解も深まりました。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

ここで、私はお茶大参加者の中で唯一化学を専攻しているいわゆる理系の人間でした。理系の人間が文系の問題に向き合うことは、外国語を学ぶように難しいことでもあります。つまり、私がこのフォーラムに参加するにあたっては「言語の壁」と「分野の壁」の2つの壁を乗り越える必要がありました。そんな中私が参加を決定した理由は2つあります。1つ目の理由は、環境問題は化学に大きく関わっている、すなわちテクノロジーの発展と環境問題は切っても切り離せないと思ったからです。そこで今回のフォーラムでは化学を学ぶ者の視線から環境問題について深く検討できる良い機会であると考えました。2つ目は普段化学科の授業だけでは学ぶことのできない環境問題（人為的なものであったり、社会に関わるようなもの）にも触れ、考え、環境問題はサイエンスにとどまらないことを意識したかったためであります。すなわち、文系・理系の枠を超えた新たな視点をえることは、国際交流や外国語取得とも類似していると考えたのです。

また、本フォーラムの私たちの使用言語は英語ということで、発表のための調査やパワーポイント作成には比較的多くの時間を費やしました。日本人が英語で学び、アメリカ人が日本語で学ぶというのは国際交流・外国語教育双方の促進に非常に効果的であることは理解していましたが、やはり日本語を使った場合に比べるとそれなりの労力を要しました。そこで最も役に立ったのがヴァッサー大学の「バディ」の存在です。昨年11月頃に双方の大学の参加者から類似した発表内容をもつ2人がペアとして割り振られ、バディ間では事前にSNSなどを用いて交流することが推奨されていました。ヴァッサー側の参加者は日本語が堪能な学生が多いため、実際の交流には英語と日本語の2つを使用しながらお互いの明確でない点を指摘しあうことが可能でした。また、この制度のおかげで発表に日米間の比較を加えることもできたのでこの試みは非常に有用であったと感じました。ヴァッサーの参加者、特に私のバディの方には週末のNYC観光のときにもとてもお世話になりました。ありがとうございました。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

今回のフォーラムで最も評価される点は実際にアメリカの大学に訪れ、そこでフォーラム参加者以外の学生とも接することができたことであると考えます。滞在はわずか1週間でありましたが、日本語を専攻している学生ともそうでない学生とも会話することが可能で、またイベントなどに参加する機会も存在したために異なった価値観や考え方を体感することができました。これは国際交流やシティズンシップ教育の面でも最も大切なことであると考えます。もちろん日本にいても海外の学生と接することはできますが、実際に私たちが外国人となつて行うアメリカでの交流はまた一回り有用で、自分自身もわずかながら成長できたと感じました。

少し気になった点としては、滞在中はポキプシー及びNYCのホテルに宿泊したことにより食事や移動にお金が多くかかったことが挙げられます。フォーラム参加ですので授業料などはかからず比較的リーズナブルであるという印象でしたが、滞在中の出費がかさんだため金銭面でもう少し抑えられるところがないか見直したほうがいいと思いました。（アメリカ、それもニューヨークに滞在するとなるとお金がかかることも十分理解できますが）

4. その他

最後に、私は将来化学者になりたいと考えています。それはこれまでに人類が作り上げてきたテクノロジーをさらに発展できるよう、そしてこれまでに人類が破壊してきた地球環境を取り戻すためであります。

環境問題を解決するには、今回のフォーラムのような「分野の枠を超えた話し合いによる問題意識」と、具体的な研究などによる「化学的アプローチ」の双方が不可欠であると考えていますが、化学者は自らの専門外に対しては前者の問題意識を感じる場面が少ないと感じています。そこで私は今回のフォーラム参加をきっかけに、一見理系とは関係のないように思われがちな事柄も研究の一部に生かされるような研究者、すなわち「サイエンスにとどまらない研究者」を目指したいと思えます。

フォーラム修了レポート

真の国際交流へ

1. 学問的学び

以前、「環境問題」は壮大すぎるテーマであると感じていたが、今回のフォーラムでの議論を通じ、私たちひとりひとりの思想・行動が如実に反映されるものであるということを実感した。

日米の学生間で白熱した議論の一つに、ゴミ処理問題があった。東京ではプラスチックが燃えるゴミに含まれていることやアメリカでリサイクルがどのように行われているかなど、互いの国の情報を共有した。現在出回っているプラスチックが環境に悪く、リサイクルや分別が重要だという認識も一致した。しかし、各大学での現状の違いが話題になった。お茶の水女子大学ではシートとリサイクル用の容器を使用し、正しく分別が行われていると紹介されると、ヴァッサー側の学生たちは驚いていた。確かに、ヴァッサー大学の食堂では食べ残し・紙・プラスチックなど分別の表示があるものの、ほとんどの学生はその表示を気にする様子もなくゴミを捨てていたのだ。ヴァッサー大学ではヴィーガン向けのスイーツまであって環境への意識が高いと思えるのに、ゴミの扱いが良くないことを不思議に感じた。そして、人数や規模の差はあるものの、なぜここまで違いが出るのかが議論になった。その場ですぐに答えが出たわけではなかったが、意見が活発に交わされていく中で皆の意識が一気に集中していくのを肌で感じた。

また、日本の環境問題についてヴァッサー大学側が発表することが多々あり、沖縄での珊瑚の養殖から国際芸術祭など多岐にわたるテーマが扱われていて感銘を受けた。実際に被害を受けるなど、身近に感じることができる環境問題には向き合いやすいが、その他の環境問題に目を向けることはなかなか難しい。だからこそ、国際フォーラムで自分が住む場所から遠く離れた地域について興味・意見を持って発表するという事は、環境問題を地球規模の問題として捉えている意識の表れであり、解決のために大切な姿勢であると考えた。地域ごとに自然・気候といった環境が異なり、解決への取り組みも異なる。遠く離れた場所から関心が集まって情報を共有し、このような国際フォーラムから地域の問題を世界で協力して解決に向かう動きが広がっていくべきだ。同時に、自分の国で起きていることなのにほとんど知識がないことに焦りを覚えたが、「自分の国で起きていることなのに」という視点もおかしいと考えるようになった。国家という人間が勝手に決めた境界は環境問題の前には無意味であるからだ。

そして、環境問題を議論する中で「風評被害」「デマ」といった問題が何度か注目された。東日本大震災後の原発事故やまさに現在深刻化しているコロナウイルスの感染拡大など、目に見えない恐怖に直面した時に間違った風評被害やデマにより別の被害が発生する。ある発表者がこのような話題に触れた際、環境問題そのものと同じくらい危険なのは

この風評被害・デマであると気づいた。自然災害に直接被害を受けている弱者が、風評被害やデマによりハラスメントを受けることがあってはならない。今の時代は SNS の普及によって情報の拡散がクリックひとつで簡単に行われ、誰でも加害者になりうる。自然災害を未然に防ぐことは難しいが、風評被害やデマは人々の意識次第で減らすことができるはずだ。何が本当なのか一人一人が見極めるためにはどうすればよいのかという問いをヴァッサーの学生に投げかけたところ、アカデミックペーパーを読んだり経験している人の声をもっと広めたりという意見が返ってきた。非常に納得したとともに、実現するために何ができるかが自分の今後の課題となった。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

国際学生フォーラムの初日、東日本大震災で悲しみに暮れる日本に世界各国から応援と支援が寄せられ、再度立ち上がろうとしたのが本フォーラムのはじまりだという話を聞いた。東日本大震災が起きた当時、私はまだ 10 歳だったため、世界からの支援の実情などを知る機会もなかった。震災から 9 年経った現在、初めて当時の国際的な支援について映像などを通して知り、そのようなフォーラムに自分が参加する意味について深く考えながら過ごすことができた。その一方で、やはり国際交流における言語の壁というものの大きさを実感することにもなった。

まず、いかに言語能力が国際交流に大切なのかをバディとの関わりから学ぶこととなった。ヴァッサー大学の学生は、英語が母語でない人が多かったが、皆英語はもちろんそれ以外に一つ以上の言語を会話できるレベルまで習得しているように思えた。私のバディも母語の韓国語、英語、日本語を使いこなし、日本語は趣味の話まですんなり通じるほどだった。一方、私は英語を聞き取るのがやっとで、バディと会話するときは日本語でスムーズに進めてしまっていた。他のヴァッサー大学の学生と比べても彼女の日本語能力は群を抜いて高く、そのおかげで予想以上に仲を深めることができた。かなり仲良くなった後で、食事の場でもジェンダーや政治問題についてナチュラルに意見を交わすようにまでなった。このようにフランクに話した時間は、フォーラムなど公式の場で話した時間よりも肩の力が抜けていて、より自分の思いを率直に伝えることができた気がした。使用言語が異なったり、言語能力に差があったりする場合は通訳で意見交換することが可能だ。だが、通訳を通してあのように仲良くなれるとは思えない。真の国際交流、つまり心と心をダイレクトに交えるには、同等の立場で個人として他者と関わることが必要であると考えられる。そして、同等の立場で対話をすることでその個人としての関係を築くことができる。フォーラムの期間、確かに私はバディに甘えていたと同時に、バディから国際交流における語学力の重要性を痛感した。

また、バディへの甘えでは乗り越えられない言語の壁も多々あった。それは、ディスカッションの場においてはっきりと表れた。本フォーラムにおいて、確かに言語へのさまざまな配慮・工夫はなされていた。例えば、英語で発表する部分は日本語字幕をつけ、日本

語で発表する部分は英語字幕をつけるといった工夫を個人で行っている人がいた。だが、一番肝心のディスカッション・意見交換の場においては言語能力がないと有意義な結果を得られないと感じた。私は英語を正確に聞き取り、意図を汲み取り、それに対してその場で答えるという行為をできるほどの英語力がなかった。ディスカッションは文字通り言葉のキャッチボールであり、英語を聞いて頭の中で日本語に訳して考える時間などはない。英語で聞いて考えて答えなければ間に合わなかった。実際に発言した時以外に発言をしたいという気持ちが高ぶった瞬間が何度もあったが、言葉にできずにそのまま呑み込んでしまった。せっかく意見を持っていても発言しなければあまりその場にいる意味がないようにも思えた。また、英語ができないからといって外国人の医療対応を受け付けられないといった日本の問題が取り上げられた時、自分も同じような状況にいるのだと思った。そのような日本人を生む日本の教育が議論になり、ヴァッサー大学の学生から「恥ずかしがる必要はない」という意見が出た。自分が発言できないのは恥ずかしがっていたからではなかったのが非常にもどかしく感じたが、どちらにしろ語学力があれば解決してしまう囚考えた。国際交流といえども個人の努力・能力が学びの鍵になるとわかった。

3. イベントとしてのフォーラムについて

まず、評価点を三点述べる。

一点目は、時間に余裕のあるスケジュールであった点である。今回のフォーラムでは現地に入ってから発表の準備時間が設けられており、学生それぞれが自由に調整できる無理のないスケジュールが組まれていた。現地の学生と一緒にご飯を食べたり、大学構内を紹介してもらったりと発表の場以外にも交流する時間があり、仲を深めることができた。それによって発表やディスカッションの場に関わりやすくなったと感じた。

二点目は、フォーラムの参加者一人一人にバディが振り分けられた点である。もしこの制度がなかったら、現地に馴染む第一歩がなかなか踏み出せなかったのではないかと考える。バディとは事前に連絡を取っていたからこそ現地に着いてからもスムーズに交流でき、環境に早く馴染むことができた。また、ネイティブチェックをしてもらったり、フォーラムの場以外でも気軽に意見交換をしたりと、バディがいたからこそ学べたことが多々あったと考える。

三点目は、教授が学生に答えを与えないというスタンスを貫いてフォーラムを主催していた点である。普段の授業だと、教授が答えを導くような形で講義が進められていくことが多いが、本フォーラムではあくまで学生主体で進んでいった。主催した教授の存在を気にするのではなく、自分の興味関心に素直になることができたので、普段の授業以上に学ぶ意欲を引き立てられた。加えて、ヴァッサー側の教授が生徒の発表に対して質問していたのも評価できると考える。答えを導くような感じではなく、学生と同じように素朴な疑問をぶつけていて、教授も意見していくことでさらにオープンな議論になったと思える。

次に、改善点を二点述べる。

一点目は、フォーラムでの発表がメインになりすぎていた点である。お茶の水女子大学側は英語で発表することが決まっていたこともあり、かなり発表に焦点が当たってしまったように感じる。発表が終わったら緊張感が一気にゆるんだ感覚を覚えたので、発表すること自体が目的になりつつあったのではないかと反省した。そこで、一度の発表で満足するのではなく、授業の中で何回か発表とフィードバックの時間を設け、現地ではさらに考えを深めた発表をするなど、段階的な発表をしてもいいのではないかと提案したい。それによってお茶の水女子大学内での交流も事前に進められると考える。

二点目は、フォーラムのテーマである「環境問題」の許容範囲がわかりにくい点である。今回の場合はかなり広がったように思える。テーマの範囲が広すぎると、事前知識が足りないことから発表自体の理解に苦戦してしまう。ある程度事前に知識をつけることが可能な範囲でテーマを設定すれば、様々なバックグラウンドを持つ参加者でもより有意義な時間を過ごすことができるのではないかと考える。

フォーラム修了レポート

今フォーラムからの新しい視点の獲得

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

今回のフォーラムのための文献調査からは、実は勘づいている問題でありながら深い興味を持たなかった社会の変化の根本的原因を知ることができた。結果的には調査前に立てた仮説とは大きく異なる結果となり少々戸惑う部分があった。しかしながら、近年注目されている問題であるがために自身の思う以上に知らないことが多いという事実も今回得た重要な気づきである。また、今後の研究の進展が早いことも予想され、これからはより一層能動的に新しい事実を調べなければならないと感じた。

今回のフォーラムで多くの人に関心を寄せ調査したプラスチックの生産、利用に関しても同じことがいえる。プラスチックは紙や鉄とは違い、たったの100年ほど前に生み出された材料である。その使い勝手の良さから瞬く間に大量生産され使用されるようになったため、プラスチックが環境に与える影響についての調査がそこまでされず、関心があまり持たれていなかった。近年プラスチックが環境破壊や生物に害を及ぼしていることは認知度もあり私も知っていた。けれども今回のフォーラムで発表を聞き、自分の認識はかなり古いままであることを思い知らされた。特に衝撃を覚えたのは、日本でのリサイクル事情と、マイクロプラスチックについてである。日本は環境問題に力を入れて取り組んでいる国と自認しており、リサイクルを行っていることも誇れる部分であると思っていた。しかしながらそのリサイクルの実情は想像よりも粗末なもので、他国に分別されたペットボトル等を輸出し、処理は受け入れ国の途上国に完全に託すというものだと知った。しかもその中でも綺麗なものだけがリサイクル対象であるためほとんどがリサイクルされないという事実にはただ驚くことしかできなかった。持続可能な社会のために自分は分別ができていると考えていた自身の認識の甘さ、自分の近辺だけという視野の狭さ、さらにはその視野から物事を判断していた愚かさを痛感したのである。リサイクルのみではもう解決できない問題であるという事実を目をそらさず、プラスチッ

クの多用から踏みとどまる必要を強く感じた。また、マイクロプラスチックについてはその存在は知っていたものの、特に汚染が激しいわけではない普通の川岸からも検出されたという発表内容も驚きであった。それに加えてその後のディスカッションでも多くの疑問がされたことや検出された量の比較対象がないという事実から、本当に近年注目され始めた研究対象であることがうかがえた。マイクロプラスチックが人間や環境にどれだけ有害なのかもまだはっきりとわかっていないところから、環境問題がさらに深刻である可能性を垣間みたように思う。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

日本側から見たアメリカは大量生産大量消費の国で、国としては環境問題にあまり関心がなく、取り組んでいないように見える。ゴミの分別については、日本のように細かく分けることなく、電池などの危険物もそのまま燃えるゴミにすてると聞いていたし、冷房も日本と比べかなり低い温度に設定している。これらからはアメリカで環境問題に配慮した行動が行われているとは考えにくかったのである。しかし今回のフォーラムを通して、国家全体ではなく個人単位でみると、想像以上に皆が現状の環境に問題意識を持っており、個人単位で活動しているということがわかった。実際にヴァッサー大学にはリサイクルの分別ボックスや電気機器の回収ボックスが設けられているし、環境のために畜産物を食べないビーガンとしての生活を送る人がいた。これらの、国全体で動くとする日本とは違い、個々人で環境問題に取り組む姿は、アメリカの社会のあり方を表しているのではないだろうか。また、集団心理が働きあまり意欲的に環境問題に取り組んでいないかもしれない日本と比較して、アメリカの方がそれぞれが意欲的に環境問題に対して行動を起こしていてよっぽど効果的なものかもしれない。これは学校での学びや資料からはわかり得なかったことだと思う。また、アメリカに訪れるだけでなく、ディスカッションを行えたからこそその気づきであったとも考える。さらにその気づきから、環境問題は世界で取り組むべき課題であり、個々が国を超えて実際に取り組んでいるのだと知ることができたのは大きな成果だと言える。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

正直ここまでこのフォーラムから学び、気づきを得られるとは思っていなかった。上記したような意識の変化はさらに長期的な滞在や係わりからしか得られないと考えていたからである。この点については、今学期の中盤あたりから現地のバディと連絡を取り合いより近しく話しやすい環境が整えられていたからだと考えられ、評価されるべき点ではないだろうか。また、フォーラム中の言語だが、相手の発表を日本語で聞き、相手も私たちの発表を英語できくという体制が、より相互理解につながったと考える。今回のフォーラムでも少し英語の発表があったが、やはりこちら側が自信を持って理解したとは言い切れず、質問がしづらくなってしまったことは否定できない。もちろん日本側の英語力の不足とも言えるが、相手の言語で発表することにより、伝えようとする姿勢が感じられ、そこから意見交換のしやすさに繋がったと思う。

また、今まで自分が学んだ言語を実際に生かす場としての意義は大きい。大学内の授業では先生のみがネイティブスピーカーで生徒は日本人なので、なかなか意思伝達のためという言語本来の目的に注意をおくことは難しい。短期留学のプログラムもあるが、言語教育に重きをおいているため現地の生徒と意見交換をする機会もほとんどない。そんな中で、実践を通して学ぶこと、そして学術的な内容について討論する機会を与える今回のフォーラムはとても意味のあることだったと考える。

フォーラム修了レポート

国際学生フォーラムで学んだこと

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

今回のフォーラムのテーマである環境問題について、様々な問題があるのだということを知ることができた。今まで環境問題といえば砂漠化や大気汚染、地球温暖化やそこからくる異常気象や海面上昇などの問題しか自分一人では思い浮かばなかった。ファストファッションを環境問題として考えたこともなかったし、シェアサイクルや動物の問題もあまり深く知らなかった。たくさんの自分と違う考え方に触れることができたということが、このフォーラムで得られたことのなかで最も大きなことだと思う。また、自分のグループでは移民に関する問題という、一般的には環境問題としてみなされない問題を扱ったが、日本の移民問題には解決すべき問題がたくさんあり、このプレゼンのために調べてみて初めて知ったことばかりだった。環境問題という分野でなくても、移民や外国人との共生についての問題の教育をもっと学校で取り扱うべきなのではないかと思った。

そのほかに技術的な面で学んだことは、学術的なプレゼンの方法である。英語でプレゼンをするのは高校の時に少しやったことがあったが、自分一人で、15分もの長さのプレゼンは初めてだったので、パワーポイントの作り方やプレゼン原稿の準備など、学問的なプレゼンの方法をきちんと学ぶことができた。初めての経験でまだまだ至らないところも多く、もっとうまくやれたのではないかと思う部分もたくさんあった。加えて、プレゼン原稿の作成が思ったようにはかどらず、自分の英語力の未熟さを痛感した。今後は英語の検定試験に挑戦したり、大学で英語プレゼンの授業を履修したりするなどして、今回学んだことを生かしつつ、英語力の向上とプレゼンの上達のために努力していきたい。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

国際交流についてはヴァッサーの学生たちと交流することでお互いの学生生活や文化について知ることができたのがとてもよかった。また、バディの学生を決めて事前にオンラインでやり取りができたことで、お互いに親近感を持った状態で実際に会うことができたのもとてもよかったと思う。一緒に週末のフィールドワークに行くことができたのも、コミュニケーションをとるとてもいい機会となってよかった。

外国語使用については、自分のプレゼンに対する質問にはなるべく英語で答えるように努めたが、原稿がない状態でもっとスラスラ答えられるようになりたいと思った。バディとの会話の時にはお互い日本語と英語の両方で会話をしていて、自分がバディの言いたいことが分からないこともあり、言語能力の未熟さを感じた。しかし、学校では習わないような日常会話の英語に触れることができたので勉強になった。ヴァッサーの学生で、日本語で話しかけてくれる学生にはこちらも日本語で話をしてしまっていたので、英語を話す機会がとても多かったかといわれるとそうでもなかったかもしれないが、向こうの学生たちは日本語を勉強しているのでその手助けになっていたら嬉しい。

シティズンシップ教育の点からは、環境問題についてより真剣に向き合おうと思ったのもあるが、自分のアイデンティティについての意識が、今回のフォーラムで最も変化した部分だと思う。様々な国の学生と交流し、自分が日本に生まれ育ってきたのに日本について本当はあまりよくわかっていないのだということに気づかされた。ほかの国の人から自分の国について聞かれたときに、伝えられることが少なく、自分でもこんなに知らなかったんだと思い知らされた。日本の中でもまだ行ったことのない場所もたくさんあり、多文化交流について改めて考えなければいけないと思った。多文化交流は、それぞれが自分の文化について知っていて、相手に伝えることができなくては成立しないものだと思ふことができた。大学生という、時間に余裕のある今のうちに、日本の様々な場所を訪れたり、日本の文化について触れたりして、次にこのような交流の機会を得ることができた際にきちんと自分の文化をほかの国の人に伝えられるようになりたいと思った。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

共通のテーマについてお互いに考え、お互いの言葉でプレゼンをしあうというのはよかったと思う。母国語以外の言葉でプレゼンする大変さがお互いにわかるので、より相手のプレゼンにしっかり耳を傾け、質問も積極的にすることができたからだ。ただ、プレゼンのなかに専門知識や用語が多くなってくると、英語のプレゼンでは理解できないことも多かったので、そのようなポイントについてはワードリストのようなものがあるとより理解を深められたのではないかと思う。

4. その他

大学の授業に参加させてもらえたのがとてもよかった。日本の大学の授業とは違い、学生が教授の話の最中でも積極的に質問をする様子がとても新鮮だった。これはヴァッサー大学が少人数制の授業を大切にしているためでもあると思うが、教授も積極的に学生を指名し、学生も積極的に意見を言うという、授業に対する姿勢の違いにとっても驚いた。

フォーラム修了レポート

多くの学びを得たヴァッサーでの10日間

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

一概に「環境問題」と言っても切り取り方次第では本当に多様な問題があって、どれも複雑に絡み合っている問題なのだということが肌身で感じられた。特に私の場合は普段あまり理系の分野から環境問題について考えたことがなかったので、なぜ環境問題においてプラスチックがここまで騒がれているのかだったり電子廃棄物が抱えている問題だったりを知ることができてそもそもの知識がこのフォーラムを経て確実についたと思う。ただそれだけではなく、「理系分野だから自分とは関係ない」ということは一切なくて、どの分野でも自分が専門としている領域とつながっているということも同時に実感した。例えばプラスチックゴミにしても電子廃棄物にしても先進国が発展途上国に有償でゴミを輸送しているという問題があるということを知った。もちろんこれは解決されなければならない問題なのだが、一方で「ゴミを受け付けることで得られるお金を支えとしている人がいる」という事実を無視してはならず、一方的にゴミの輸出をやめろということもできない。ここで普段私が学んでいる国際学がこの問題に絡んできてとても考えさせられた。「環境問題」というのは非常に漠然としていて広いテーマであったが、だからこそそれぞれが関心のあるテーマで発表し、たくさんの新しい知識を吸収することができたし、一見自分が普段学んでいる領域とはかけ離れているように思えるテーマも掘り下げていくとどこかしら関係があって、より親身になって「環境」について考えることができたように思う。今回のフォーラムを通して、私たちが日常生活でできる「環境」への取り組みも多く知ることができたのでこれらか私自身積極的に実践していきたいし、このフォーラムで学んだことを周りにも伝えていきたいと思う。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

今回は英語を学習している日本人の私たちと、日本語を学習しているアメリカの大学生がメインとなって交流したが、なかなか普段日本語/英語をリアルで話す機会がない

双方にとってこのフォーラムでは練習する良い機会となったのではないかと思います。まだまだ練習段階でそれほど上手く話すことができない人にとっても本物の発音や話し方を聞くことができたのは外国語教育として貴重な機会となったように感じる。フォーラム中は、ヴァッサー大学の学生は日本語を、私たちお茶の水女子大学の学生は英語を使うようにという決まりが一応あったが、あまりそれに縛られることなく双方が日本語と英語を上手く混ぜながら臨機応変にコミュニケーションをとっていた姿が個人的にはとても印象に残った。外国語を学習する際、聞くスキルの方が話すスキルよりもより早く習得できるように感じるが、その特性を生かせば新しい国際交流の形もあるのではないかと感じた。例えば日本語を母語とする人は日本語で日本語学習者に話しかけ、話しかけられた英語話者は英語で応答する、というコミュニケーションのあり方があっても良いのではないかと思った。違う言語を母語とする人同士がコミュニケーションを取ろうとする際、どちらかの言語に合わせる形を取ると合わせる側の方がどうしても負担が大きく立場が弱くなってしまう。だからこそ今回のフォーラムのように双方がお互いの言語を使うことで歩みよるようにしようとするのだが、ただやはりそれでは言いたいことが上手く伝えられないもどかしさは生まれてしまうように感じた。もし双方がお互いの言語を十分に理解できる能力があるのであれば、お互いの伝えやすい言語を用いてコミュニケーションをとっても良いのではないかと思います。ただ、その時にも母語を非母語話者にもわかりやすい言葉で話す心がけは非常に重要だと感じた。案外わかりやすい日本語で話すということは日本語を母語とする私たちには難しいことで、常に意識をしていないと難解な熟語だったり、あるいは砕けた若者言葉を使ってしまうということが身をもって感じられ、良い経験となった。私の中でも言語の壁を越えたコミュニケーションの正解というものはまだ見つかってはいないので引き続き考えていきたいが、歩み寄る姿勢は必要不可欠だという学びは得られた。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

事前にバディが生まれ、やり取りをすることができていたので、自分のバディがどの

ような人なのか会う前から知ることができた点は良かったと思う。ただ授業外での交流がメインでそのやりとりは各自に委ねられていたので、もう少し授業内で各自バディとコミュニケーションをとる機会が設けられていても良かったのではないかと思う。授業外の時間でいきなりテレビ通話をするに対するハードルは高く、メッセージでのやりとりしかできなかつたので、事前にテレビ電話等もできていたらさらに濃い交流になっていたのかもしれないと思った。

また各ターム 30 分程度のディスカッションの時間が設けられており、時間に関しては十分なように初めは思えたが、実際に行ってみると質疑応答で時間が過ぎてしまうことが多く、発表者と質問者の二方向でのやり取りで止まってしまった点に改善の余地を感じた。質疑応答の時間とディスカッションの時間を分けて設けることで、各発表に対する疑問点は解消しつつも、発表内容に沿った多方向の意見交換ができたのではないかと思う。

4. その他

文理の壁も国籍の壁も言語の壁も越えた今回のフォーラムは「環境問題」という点においても国際交流という点においても多くの新しいことを学ぶ良い機会となりました。ちょうど就活と被る時期だったこともあり初めは参加を渋っていましたが、フォーラムが終わった今、参加して良かったと心から思っています。声をかけてくださった森山先生には心から感謝を申し上げます。また、今回私たちにこのような素晴らしい機会を用意してくださったヴァッサー側、お茶大側双方の関係者の皆様にも心から感謝しております。ヴァッサー大学で出会った素敵な学生さんたちとはこれからも交流を続けられたらと思います。どうかこれからも仲良くしていきましょうね。お茶の水女子大学の学生とヴァッサー大学の学生がこれからも素敵な関係を築いていけることを願って締め言葉とさせていただきます。

フォーラム修了レポート

環境問題に対する社会の構成者としての学び

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

私は環境問題についてシェアサイクルに焦点を当てて、学習を進めた。環境問題の中でも温室効果ガスの増加は特に深刻な問題となっている。温室効果ガスの増加により、世界中で気候変動が進行し、2015年にはCOPによりパリ協定が採択され、排出削減への取り組みが定められた。そのような中で、シェアサイクルは、自動車にとってかわる環境に優しい移動手段として注目を集めている。シェアサイクルについて日本とアメリカの両国でのシェアサイクルを環境問題への貢献、また、ビジネスとして実際に成立するのかを分析したことで、シェアサイクルの有益性や懸念点について考察することができた。

一方でヴァッサー大学の学生のプレゼンテーションを聞き、ある特定種の魚の生存を脅かす乱獲が問題であり、持続可能な漁業が必要とされることや、電子機器廃棄物についてリサイクルされないものが多くあり、都市メダルプロジェクトにみられるような再生への取り組みが必要とされることが分かった。環境問題の内容は多岐にわたることを知り、私たちがこの問題について議論し、考えを深めていくことがいかに重要であるかを再確認できたと感じる。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

以下、国際交流的側面とシティズンシップ教育的側面について考察する。

国際交流的側面においては、現地学生との交流によって、学生の意識の違いに気づかされた。ヴァッサー大学の学生は、日常で友人と政治について話す、また、NPO 法人主催の活動に積極的に参加するなど日ごろから社会問題に関心を持ち、主体的な学び方をしていると感じた。一方で、日本の学生は、一概には言えないものの、社会問題について関心のある学生は、アメリカほど多くはないのではないかと考えた。日本財団による

18歳意識調査によると、「自分は責任がある社会の一因だと思う。」と回答した日本人学生は44.8パーセントに対しアメリカの学生は88.6パーセント。「自分で国や社会を変えられると思う。」と回答した日本人学生は18.3パーセントに対し、アメリカの学生は65.7パーセント。「社会問題について家族や友人など周りの人と積極的に議論している。」と回答した日本人学生は27.2パーセントに対し、アメリカ人学生は68.4パーセントであり、データの的にもアメリカの学生は日本の学生より、社会問題を身近に感じ、向き合おうという姿勢がある傾向がみられることが分かった。交流によって、アメリカの学生の社会問題への積極的な向き合い方に感銘を受け、自身も社会問題に関心を持ちたいという動機づけになった。国際交流はこのように異なる文化について知り、理解するという点で意義のあるものであるのだと考える。

次にシティズンシップ教育的側面について述べる。そもそも、シティズンシップ教育とは、一人一人がグローバルな社会を含む市民社会の動因を構成し、その社会を変革するメンバーを作り出す教育のことである[池野(2014)]。本フォーラムにおいては、ヴァッサー大学の学生との交流を通し、環境問題について知識を深め、また、他の学生の環境問題に対する向き合い方を知り、自分自身も社会に参画し、役割を担っていきべき立場にあるのだと意識することができた。それに加えて、自身がシェアサイクルについて考察し、また、環境に対する様々な発表を聞いたことで、多角的にまた批判的に環境問題を見つめることができたと感じる。

外国語学習の側面については、発表の準備を進めるにあたり、学問的な英語でのプレゼンテーションの構成を身につけることができ、英語で発表原稿の作成を行ったことで、英語発信能力を伸ばすことができたと感じる。

交流においては、国際学生フォーラム以前からバディーとオンラインで交流を行ったことで双方について知り、より深い文化的な交流ができたと感じる。また、ヴァッサー大学の授業について質問したり、英語の表現があっているかを確認してもらったりとバディーに多くのことでサポートしてもらった。バディーは日本語ではなく英語での発表だったため、私が日本語をサポートする双方の助け合いとはならなかったものの、お互

いの学習言語のパートナーと交流することは良いことであったのではないかと考える。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

ヴァッサー大学とお茶の水女子大学との交流は2004年に始まり、東日本大震災を契機として、国際学生フォーラムは開催されるようになった。これまでの8年間では、原子力発電などの移民問題に加え、移民・難民問題といったグローバル時代の今日において重要となる問題について話し合いがなされてきたが、第9回国際学生フォーラムでは環境問題に焦点を充てることとなった。

そして、私達お茶の水女子大学の学生はヴァッサー大学の学生と共に環境問題という一つのテーマについて追究した。

このようにして、毎年ヴァッサー大学とお茶の水女子大学の間で共同の学びが行われ、ただお互いの言語を学ぶだけではなく、今日の世界規模での問題について、異なる視点からアプローチすることは意義のあることであると考えます。

なぜなら、広義に取れる問題を自分の切り口で分析して考えをまとめ、ほかの学生のプレゼンテーションから新たな視点についても学ぶことで、社会問題が自分にも関わりのあることだと気づけ、課題山積の世界の中で、未来を担う私たちが果たす役割を認識し、今後の進むべき方向について考えていくことが可能となるからだ。

一方で、事前準備で行われていた授業でのオンラインビデオ通話を用いた交流では、テーマ発表と自己紹介のみが行われたため、さらに深く話すことができればよいのではないかと考えた。時間が限られていることもあり難しいことではあると思うが、お互いの大学を紹介したり、お互いの考える環境問題について話し合ったりすることが出来れば、更に親睦を深めることができるのではないだろうか。

4. その他

ヴァッサー大学では、授業内で学生が積極的に質問していることに驚かされた。日本の大学での授業で、私が受講しているものでは、質問があるかどうか先生が学生に尋ね

た際に質問する学生はほとんどいない。その理由は河本(1999)によると他者の存在が最も理由づけられるという。他者の存在に対する意識が無質問という状況を引き起こしているのだ。しかしながら、アメリカの授業内においても他者が存在するというのは同じことである。なぜこのような違いが生じるのか疑問に感じた。

インターネットで調べたところ、アメリカの大学では、単位の所得基準となる点数が高いうえに、就職でGPAが重視されるという。学生が良い成績を収めるために、疑問点を明らかにしようとする姿勢が強いのではないかと考えられる。だが、その他にも学生が授業に対して強く関心を持っており、知識の探求を行う過程で質問をするのだと考えることもできる。

私自身も授業内で質問することを躊躇してしまうことが多いが、彼らを見習い積極的に、質問をすることで主体的に学んでいきたいと感じた。

<参考文献>

池野範男(2014)「グローバル時代のシティズンシップ教育—問題点と可能性:民主主義と公共の論理—」『教育学研究』2号、138-149.

河本肇(1999)「授業中における無質問の理由に関する研究」『富山大学教育学紀要』54号、155-160.

18歳意識調査「第二十回—社会や国に対する意識調査—」要約版
(最終閲覧日:2020年2月28日)wha_pro_eig_97.pdf.

フォーラム修了レポート

学びと交流

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

教育の意義を改めて実感した。はじめは、環境問題という学生にはアプローチしづらい問題についてどこまで深く話し合えるのか正直不安だった。「私たちにできることからやろう」というありきたりな結論しか出せないのではないかとも思っていた。しかし、同一のテーマを一人一人が異なる解釈で理解し、発表した内容は、非常に興味深いものであった。であるからこそ議論も活発になったのだと思う。ベジタリアンになった理由に環境問題意識を挙げていたこと、e-waste削減のために電池のリサイクルを行っていること、後期高齢者社会と老害意識への対応として身の回りの高齢者を大切にすることを発表から知り、発表者の熱意や意識に触れ、「自分にできることをやる」という結論は決してありきたりだと馬鹿にできないものだとわかり反省した。問題意識を持ち、それを自身の問題として捉え可以从容に行い、広めていこうとする姿勢は教育に端を発したものであり、その点で教育の意義も改めて実感する五日間となった。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

2.1 外国語使用に関して

「自分が思っていたよりも英語が聞き取れること」、「意外と伝わること」、「伝えようとする努力・工夫が大事なこと」を学んだ。

外国語を用いてセンシティブな議論をすることはとても難しかった。特に自分の意見を伝えることが難しい。授業においては、どうしても伝えたいことがあった場合、所々日本語で話し、通訳していただくことで、伝えた。また、会話においてはスピードの速い話も意外と聞き取れたため、伝えることが肝となったが、英語と日本語を混ぜて伝えることができた。

正しい英語や、英語で伝えることに拘らず、目的（質問に答えること、質問すること等）を優先してコミュニケーションを図ることで、内容のある会話をすることができた。

もちろん、英語で伝えられなかったことは悔しいため、いずれ英語で受け答えができるよう勉強する。しかし、考えを述べることで語学は身についていくのであり、まずは交流を大切にしようと思う体験になった。

2.2 シティズンシップ的側面

国際交流を積み重ねることは「シティズンシップ教育」に意味あることだと想像できるようになった。

バディを含めヴァッサーの学生がとても素敵な人ばかりであった。中国系や韓国系のアメリカ人として様々な異文化を経験してきたからなのか、どこまでも優しく、親切で温かかった。「シティズンシップ」というカタカナ用語を特に意識することもなく今回のフォーラムに参加したが、文化を超えた思いやりの気持ちとして実感することができた。

私は今外国人労働者の労働環境に興味があるが、バディやヴァッサーの学生が日本で働きたいと思えるような環境を整えていきたいと思うようになった。学術的興味だけでなく、自身に関わる人のことを想う気持ちを持てたことで、以前よりも身近な問題となるとともに学ぶ意欲が高まった。

シティズンシップの初認識と友人を大切にしたいという気持ちは、このヴァッサー大学でのフォーラムがあったことで生まれたと間違いなく言える。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

3.1 評価できる点

1 文化交流に留まらない交流が出来た点

おそらく、文化交流のみがトピックのフォーラムであったならば、大学の授業中や休み

時間、ニューヨークでの観光時に政治的なトピックや内面的な話にまではならなかったのではないかと。

環境問題というのは与えられたテーマではあるが、環境問題に興味を持ち、学び交流する意欲を持った学生が会話をする中で、徐々に会話をする関係性が気づかれたのではないかと。なぜ環境問題を考えるのか、何のために学修するのか、大統領選はどうなるのか、人種意識とは何か、ジェンダーとは、等々親しい友人ともなかなかできない会話を短期間ですることが出来、充実したフォーラムであった。

2 学生の主体性が主とされていた点

教授側から何かを強制されることはなく、考えを押し付けられることもなかった。初回授業時の班の発表テーマ決めにおいても、先生の提案する決め方に移る前に質問や話し合いがしたいという私の意見をすぐに受け入れてくださり、各自が納得いく班に分かれることが出来たと思う。

このように、シティズンシップ教育としてまず、学生の主体性を大事にする姿勢は、学生からするととても学びやすいものであった。

3.2 改善すべき点

日本にいる間はフォーラムの趣旨、授業の進め方が不透明で分かりにくかった点。いずれについても最初に説明があったが、ザックリとしていた。フォーラムの趣旨は行ってみてわかる体験型の性質でもあるため仕方ないが、授業内容や授業計画は細かく知らせていただけるとありがたかった。ただ、こちらから質問すると教えていただけだったので、やがて学生の主体性を尊重する授業なのだと分かった。

フォーラム修了レポート

同じ地球で生きる仲間として

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

これまでの学生生活において環境問題をテーマにして学習したり議論したりする機会はほとんどなかったため、今回ほぼ初めて学問的に環境問題について考え、発表をした。一言で環境問題といっても、環境にかかわる問題は数え切れないほどありテーマ選択には悩まされた。そんな中今回私が発表テーマとして扱ったのは「ファストファッション」である。ファストファッションブランドの多くはアメリカに本社を置くブランドが多いため、アメリカの学生の前でそれらを批判するようなことを発表するのはとても緊張したが同じ学生として共感しやすいテーマであり、アメリカ人学生の意見を聞きたかったためファストファッションをテーマとすることに決めた。ファストファッションによって問題となっているのは、原料となる綿を育てるのに莫大な水や農薬を要すること、縫製工場からの汚染された排水による生態系の破壊や近隣住民への健康被害、工場で働く労働者たちの劣悪な労働環境や低賃金、完成した衣類を先進国に運んでいく際に二酸化炭素などの排出、そして売れ残った大量の商品を廃棄（多くは焼却処分）していることなど多数ある。しかし、これらの問題や現状について報道されることはそれほど多くなく、株式会社マイボイスコム（2016）の調査においてもファストファッションに対してネガティブな印象を抱いているに日本人はほとんどいないことがわかった。発表の中でアメリカの学生にファストファッションの印象を聞いたところ、手軽にファッションを楽しめる反面環境にあまりよくないためできるだけ選ばないようにしているという意見を持った学生が多くおり衝撃を受けた。環境問題に対する若者の意識の差がアメリカと日本では大きくあるように感じた。なぜこの意識の差が生まれるのかについて数名で話し合ったところ、SNSでの影響が大きいのではないかという話になった。アメリカでは俳優やモデルなどの影響を持った人が、政治や環境の問題について自らのSNSで意見や情報を発信する人が少なくないのだという。また、学生らも自分の考えをSNSを

通して発信することはよくあると言っていた。日本では政治や環境問題について公に発言することは勇気のいることだと思う。しかし環境問題といった一刻も早く解決に向けて動き出さなければいけない問題を目の前にした今、SNS など個人が意見や情報を発信していくことは非常に重要だと思った。

また、先生方の講義や他の学生の発表も興味深く、多くのことを学ぶことができた。特に数名のアメリカ側学生による日本の震災やエネルギー問題に対する発表はとても印象的である。日本に住んでいない者だからこそ持てる視点や意見を聞くことができ貴重な機会であったと思う。今回のフォーラム全体を通して、環境問題というのは地球に住んでいる以上誰もが加害者にも被害者にもなりうる問題だと強く感じた。他国と比較したり批判したりすることも大切だが、同じ惑星に生きる者として互いに助け合い地球を守っていくために自分たちの生活を見直すことが非常に重要だと感じた。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

フォーラム期間中は英語と日本語の二言語を使用していたため言語的な障壁はあまり感じなかった。参加者のほとんどがどちらかの言語を第一言語としており、もう一つの言語を学習したことがあったため可能だった言語環境ではあったと思うが複数の言語が入り混じったフォーラムは新鮮で居心地が良かった。また、ヴァッサー側の学生と日本語でコミュニケーションする際に彼らにとって分かり易い日本語を意識して話すというのが難しかった。普段の生活では日本語学習者と生活したり議論したりする機会がないのでとても貴重な経験ができたと思う。外国語教育という点では、フォーラムの質疑応答の際に英語で質問したり答えたりするのに少し時間がかかってしまったことや、パデューとの会話の中で日本語では伝わりにくい内容を英語でうまく表現できなかった経験が、もっと英語を勉強したいというモチベーションにつながった。

フォーラムに参加する前はヴァッサーの学生を「アメリカ（人）の学生」と捉え、少し構えて交流していたが、フォーラム期間中に親しくなるにつれ国籍や使用言語に関わらず「同年代の仲間」として意識するようになったと思う。出会ってから短い期間では

あったが事前にビデオ会議を行っていたり、SNSで連絡を取り合っていたりしたためすぐに打ち解け、期間後半ではお互いの国や学校での人種差別やジェンダー観についてなど深い議論をすることができた。同じ場所で同じ問題に向き合ったり、同じものを食べたりにする中で徐々に仲間意識のようなものが芽生えたのではないかと思う。同じ地球に生きる仲間としてアメリカ側の学生を捉えるようになったと同時に、環境問題も自分ごととして捉えられるようになった。「アメリカだけが」や「日本だけが」解決のために動くのではなく、協働する重要性をフォーラム期間中現地学生と交流するうちに強く感じるようになった。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

バディシステムが非常に有効的だったと思う。渡航前から連絡を取り合っていたため現地での生活に対する疑問や語学についての不安がないまま出国することができた。また、ヴァッサー大学の授業を見学させていただいたのも非常にいい経験になった。日本語の授業や国際関係の授業を見学させていただき、日本とは全く違う授業の進め方や、学生の様子を知ることができおもしろかった。フォーラムが複数日・限られた時間の中で行われていたからこそできた経験で、空き時間を有効に利用することができた。

一つ改善したほうが良いと思ったのが開催時期である。お茶大側は春休み期間であったため問題は特になかったが、ヴァッサー側は試験期間であったためバディと交流できる時間があまりなかった。お互い余裕のある時期に開催できればより深い交流が可能になるのではないだろうか。

4. その他

今回のフォーラムを通して世界中にたくさんの友人ができた。特にバディの学生とはフォーラム終了後も連絡を取り続けており、この夏には日本で再会する約束もした。このような素晴らしい機会を作っていただいた森山先生をはじめとするお茶の水女子大学、Vassar Collegeの先生方、本当にありがとうございました。

<参考文献>

マイボイスコム株式会社、2016、「ファストファッションに関するアンケート調査（第3回）」、https://myel.myvoice.jp/products/detail.php?product_id=21815.（参照2020-3-4）.

フォーラム修了レポート

様々なバックグラウンドから見る社会

1. 学問的学び（環境問題というトピックについての学び）

今回のフォーラムで興味深かったトピックはいくつもありますが、一番印象に残ったのは東日本大震災についての発表で「風評被害は、福島野菜が未だに放射能の危険性を疑われていることと、アジア人がコロナウイルスの危険性を疑われていることは同じで、どちらも環境問題である」というメッセージです。環境は自然についてだけでなく、自然の脅威を前にした私たちの問題でもあるという新しい視点を得ることができました。

2. 国際交流・外国語教育・シティズンシップ教育的側面

お茶の水女子大学を始め日本の大学では、多くの留学生を受け入れているとはいえ学生の9割以上が日本人です。そのため日頃大学生活において多様性を感じ、また多様性をどのように尊重するか、人種差別について考える状況は少ないと思います。しかしヴァッサー大学は、一つの少人数のクラスにアジア人と欧米人が半々であるほど多様な国籍・人種の学生で構成されています。この場で学ぶことは、同時にバックグラウンドが異なる相手を思いやりながら議論するという力を育むことでもあると感じました。また、ヴァッサーの学生は非常に勤勉であり、自分が大学教育を受けていることに対して社会に対する貢献の必要性をとて重く受け止めているように思いました。勉強については、日本は受験勉強のためにアメリカの高校生の平均より非常に多く勉強時間を費やすことが一般的です。そのため大学では勉強より社会的活動に重きをおく人が多く、アメリカと日本の大学における勉強の違いについてはどちらもメリットとデメリットがあります。しかしシティズンシップ教育という点においては、アメリカの大学システムはより「大学で学ぶものは社会に貢献する義務がある」というメッセージを強く発信しており、学生がそのことを意識しているように感じられました。また、今回新鮮で興味

深かったことは、ヴァッサー大学で日本語を学ぶ学生は日本語で発表し、私たちは英語で発表するという発表方法です。私たちは日頃英語の発表はよく聞いていますが、自分たちと同じように言語を学習している人たちの発表を聞くことは、自分たちの発表がどのように英語話者に聞かれているのだという視点に立つことができました。少しの文法的間違いや発音の間違いは発表においてなんの問題もなく、自分が英語で発表する際臆することなく自信を持つことの助けになったと思います。

また歴史の授業に参加をさせていただくことができたことはとても貴重な体験でした。日本の近代文学を、全く馴染みがない文化であるアメリカの学生たちが真剣に議論し合う様子、また自分が読んだ感想と同じ感想を持っていることに、小説が成り立つ文化は小説の理解に影響を与えないという小説が持つ共感性の高さに驚かされました。

3. イベントとしてのフォーラムについて（評価点・改善点）

今回のスケジュールとして、発表時間が分散されていて自由時間が多かったので、発表を二日間にまとめられれば一日スケジュールを減らすことができたのではないかと思います（宿泊数が費用に直結するため）。しかし自由時間が多いため時差ボケをすぐ解消することができ、体力を養うこともできた点はよかったです。

4. その他

今回は私にとって初めて海外の大学で学ぶ機会でした。現地の学生と交流し、実際の授業を見ることで自分たちの姿が明らかになっていく体感を得ました。また、大学について調べるきっかけとなり、文化の違いが鮮やかな事例を発見したことも興味深かったです。例えば、日本は大学生がレイプ事件や置換などを起こした場合非常に大々的に報道され大変なニュースになりますが、アメリカでは学内のレイプや性的暴行が非常に多いことが問題になっています。特にフェミニズム関連において、日本は盲目的に欧米信仰に陥ることがありますが、実際にその場に赴き、体感することで気づきの幅は大きく広がるということを学びました。その点で、今回アメリカに来られたことは非常に自分

にとって意義があることだと思います。